

令和3年5月1日

関係各位

救助救命本部長

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項について

表記の件に関して、令和2年6月3日第5回JLAシミュレーション審査会参加募集要項に基づき、検討推奨事項を発表します。

検討推奨事項

別紙のとおり

問合せ先

公益財団法人 日本ライフセービング協会

救助救命本部副本部長 菊地太／事務局担当 中山昭

〒105-0013 東京都港区浜松町2-1-18 トップスビル1F

T E L : 03-3459-1445 F A X : 03-3459-1446

<http://www.jla.gr.jp> info@jla.gr.jp

(問合せ時間 9:00～18:00)

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

審査長 溺水防止救助救命本部長 所感

石川 仁憲 溺水防止救助救命本部長

2020年は新型コロナウイルス感染症により各地の海水浴場が不開設となった。一方、ライフセーバーが活動する全国約200ヶ所の海水浴場では、毎シーズン2,000～3,000件の救助(心肺蘇生が必要な溺水事故への対応20～30件を含む)、15,000～25,000件の傷病が発生している。海岸は自然公物で、自由使用の場であることも考慮すれば、各地の海岸では海水浴場の開設、不開設に関わらず海岸利用に関するリスクへの対処が求められる。この場合、膝下までの入水とするなど利用ルールの設定だけでなく、溺水事故等を防ぐためには事故防止と救助救命を担うライフセーバーの配置は欠かせない。しかしながら、ライフセーバーが活動するためには、海水浴場ではない海岸利用に対する適切なルールの設定と、感染症患者及び感染症疑い傷病者との接触が想定されることから十分な感染予防対策が必要であった。特に感染予防対策では、サージカルマスクやフェイスシールドといったPPE(個人防護具)の装着以外に、感染リスクを下げるための救助方法や心肺蘇生法等の検討が必要であった。そこで、JLAでは、「新型コロナウイルス感染症危機下におけるライフセーバーの海水浴場等監視救助活動の可否に関するガイドライン(2020年5月)」、「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言解除後のライフセーバーの水浴場監視救護活動ガイドライン2020(2020年7月)」を策定し、ライフセーバーの安全確保に努めてきた。心肺蘇生法については、日本蘇生協議会、日本臨床救急学会、国際蘇生連絡委員会、アメリカ心臓協会、厚生労働省等、様々な機関がガイドラインを出したが、これらの内容を考慮しつつ、最終的にILS(The International Life Saving Federation)のガイドラインをベースにJLAメディカルダイレクター監修のもと設定した。このような背景もふまえ、第5回審査会での想定は、感染症危機下での救助救命活動であった。ここで、従来の審査会の傷病発生は主に波打ち際であったが、第5回では発見者の胸ほどの水深で傷病者が抱えあげられている想定であった。そのため、マスク、ディスポグローブ、ゴーグル等が未装着な1stレスキューアと傷病者の接触、1stと2ndレスキューア、本部の連携による最大限の感染防止対策が注目された。また、海水浴場でのFAはクラゲによる刺傷処置が最も多いことから、正しい処置方法の普及展開の狙いもあり、カツオノエボシ刺傷対応も加えられた。

審査会は2016年より実施し、2020年で5年目となり、回を重ねるとともに参加されるライフセーバーの救護手技や救急隊との連携能力の向上がみられた。一方、感染防止対策という新たな課題に対して、各チームの動きは異なり、審査会終了後の公的救助機関、クラブ選出の審査員、メディカルダイレクター、スーパバイザーからの講評もふまえ、その場にいた皆様それぞれに様々な気付きがあったと考えられる。審査会を通じて得られた知見を是非クラブに持ち帰って頂き、メンバーで議論し、2021年に備えて頂ければ幸いです。

審査会は2021年以降も引き続き継続して参ります。都道府県協会、各地域のライフセービングクラブ、公的救助機関、日本財団、協賛各社のご協力に深く感謝申し上げます。



第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

審査員 メディカルダイレクター等 所感

田中 秀治 メディカルダイレクター

全体の講評

雨が降り、また、なかなか集まって練習できない状況でどのチームもよく頑張ったと思います。しかし昨年のような初期から質の高い胸骨圧迫が実施されていませんし、AEDの使い方もだめでした。正直コロナの影響は大きな影響がありました。今後どのように取り組みするか、各浜でも続けて練習をしていただきたいとおもいます。

シナリオについて

シナリオは、シンプルでした。海水浴客が海の中での溺水、心停止に陥るもので呼吸原性の心停止が考えられます。1.胸骨圧迫の迅速な実施、2.AEDのパッド装着と電気ショック実施。3. AED実施前後の継続したCPR、4.救急隊への引き継ぎ 5.搬送手技と搬送中のCPRの継続 が求められます

シナリオ実施に際して考慮すべきことは、何をみたいのか、明確にするかです。大学生が多いなかで、あまり多くのことを求めるのではない方がよいと思います。

感染防御を行い、衆人への対応、溺者の適切な対応、異物除去の手技を評価、CPRの質を評価するのかの絞り込みをしてもいいかと思いました。

観察スペースで雨が降り、観察がしにくい、描きにくい、もう少し雨対応をしっかりと欲しいです。

胸骨圧迫について

胸骨圧迫については、どのチームも中断が長かったと思います。よくできていたように思います。発症初期からの質の高い胸骨圧迫と、AEDでの中断やAED後の質の高いCPRは重要です。搬送中浅くなる胸骨圧迫が、より高い質を求める(QCPRなどで評価し、確実な方法を身に着ける)ようにお願いします。

AEDについて

AEDの使用はおおむね良好でした。雨が降り、機械が濡れる心配がありました。

また、AEDのパッドの使用時に確実に汗と砂を拭くように普段から練習しましょう。

異物への対応について

異物の対応に追われ、CPRの着手をおろそかにすることは行ってはいけません。

JCS300であることをしっかり確認できたならば、感染防御としてまず手袋を装着すること、液体異物には指清拭法も忘れずに実施してください。不用意に行くと、指の損傷の危険があります。

人工呼吸

ポケットマスクを使用しての人工呼吸はやっていないところもありましたが、やはり、溺水ではBVMを使った方が安全です。

胸骨圧迫などで胃内容物が逆流することもありますので、普段から吸引など窒息に対して慣れておいて下さい。

搬送

搬送はほとんどで、救急隊任せでした。積極的な対応が期待されます。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

北村 伸哉 メディカルダイレクター

令和2年9月12日 シミュレーション審査会 御宿中央海岸会場

生憎、土砂降りに見舞われ、参加チームもエキストラも苦労したかと思えます。雨天のため、PPEは最初から付けていたチームもありましたが、グショグショで十分な感染防止策はとれなかったというか、無理だったかもしれません。CPR自体は昨年に比べ、スキルは向上したように感じました。他、除去した溺者の装飾品を砂の上に打ち捨てるチームが多く、スタッフが探して持ってきたケースもありました。傷病者の所持品はしっかり管理しないと問題になります。病院でも入れ歯や指輪など紛失する事例が多発したため、とりはずした所持品は必ず、箱や袋に入れ、保管するようにしています。雑然として現場においても注意すべき事項です。

令和2年10月24日 シミュレーション審査会 葉山大浜海岸会場

水温は低いものの晴天に恵まれ、審査会日和でした。思うところを羅列いたします。

- ・ PPEの装着に慣れていないため、せっかく救助してきた溺者を前に何もせずにPPEを着るのに終始しているチームが多かったようです。
- ・ 蘇生をすべき事例かどうかをより早く確認するためには最初に救出したライフセーバーはABを確認し、応援がPPEを装着次第、蘇生の必要性を伝え、すぐにCPRを行えるようにすべきかと思えます。
- ・ 絶え間ない胸骨圧迫ができていないチームがいくつか認められました。共通している問題点にリーダーが十分にその責務を果たしていないことがあげられます。リーダーが観衆のコントロール等、他の業務に手をとられ、CPRの質を担保できていないということです。リーダーは全体管理に徹するべきですが、マンパワーの問題でそうも行かないこともあるかと思えます。その場合はCPR担当のライフセーバーが常に胸骨圧迫とその中断時間に注意を払い、絶え間ない胸骨圧迫を心がけるべきです。
- ・ 呼吸管理については最初から異物除去だけを行い、胸骨圧迫に徹するチーム、ポケットマスクで人工呼吸をするチーム、BVMを用いたチームとバラバラでした。方向性を決めた方がよさそうです。ポケットマスクが一番、簡便で効果的だと思います。
- ・ 嘔吐物の処理に関しては汚物袋を持参したチームもあれば、砂浜にそのまま嘔吐物を残したチームもありました。嘔吐物は感染物として処理すべきでしょう。
- ・ 観衆のコントロールは蘇生の質にもかかわります。あるチームはヒューマンチェーンにより観衆から溺者を保護しようとしたのですが、残念ながら、マンパワーが足りませんでした。MD賞を獲得したチームは円を描き、この中には入らないでください。まず、ゾーニングをしていました。これは災害医学の基本であり、良い方法と考えます。また、外国人(役)にはこの線からこちらへ来ないでください。と説明。これも効果的に見えました。参考にすべき活動でした。
- ・ 御宿会場と同様、除去した溺者の装飾品を砂の上に打ち捨てるチームが多く、見受けられました。とりはずした所持品の管理をこころがけましょう。

以上が今回の所感ですが、大分、スキルは上がっているように感じました。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

朽方 規喜 メディカルダイレクター

“コロナ禍”と呼ばれる大変な時代になってしまった。毎年、競技会の救護ドクターを担当している私にとって、御宿海水浴場はインカレや予選会で大変縁が深い。もちろん審査会と競技会とは、全く異なるのだが、“水辺の事故ゼロ”という同じ目標をもっている。

今回、御宿というこの場所で、この仲間たちと、この時期に集えたこと。この事実がまず、心に沁みた。あらためて開催にご許可を頂き、ご協力を賜った御宿町、消防や海上保安庁を始めとする関係各所に、深くお礼を申し上げたい。

そしてライフセーバーは、今夏に監視活動が出来ず、十分な練習が叶わなかった。審査会参加に不安も大きかったであろう。勇気をもってこの場に臨んだ者を本当に頼もしく思う。

医学的側面からのコメントは次のとおりである。

■人工呼吸について

出場した4チームとも、心停止を伴う重症溺水者の口元にタオルをかけて、ハンズオンリーCPRを実施した。シーズン前に私を含めたメディカルダイレクターらが取りまとめたJLA感染対策ガイドラインによれば、確かにそれは正しい。一方、このウイルスは中国武漢で発生してから9か月が経過した。正体も少しみえてきた。本邦では、新型コロナウイルス感染症陽性確認者数は20歳代を中心に若年に多いものの、逆に40歳未満の死亡率は0.1%未満と極めて低い。つまり若年かつ健康なライフセーバーは、感染したとしても重症化を免れ、死亡する確率は非常に低いといえる。



第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

吉澤 大 メディカルダイレクター

【総論】

- ・ 昨年度に比べて、溺者発見の初動はライフセーバー(LS)間の連携も含めて円滑に活動できている印象でした。
- ・ 今回新設された、溺水事案発生時の当事者以外の遊泳者への対応については、各チーム様々な対応でしたが、どこまでLSの判断で規制範囲を広めるかは各海水浴場の活動方針によって異なること、また個人の活動をどこまで制限できるかという法的制限にも関連することから、監視活動前に主催者、関連行政との合意をとっておく必要があるものと感じました。
- ・ 今回、溺者が新型コロナウイルス感染症(COVID-19 感染症)罹患者の可能性を考慮して活動するものと想定しますが、活動するLSにどこまで意識付けさせるかについては、設定内で明確にしても良いのではないかと思います。

【各チームの監視業務関連】

- ・ 幾つか医学的に改善を要するものと感じた箇所が見られました。
 - a) CPRの胸骨圧迫時に手掌の位地が禁忌部位(剣状突起上)で行われていた。
おそらくAEDパッドの貼付部位を考慮してのことと思慮しましたが、この場合であっても、パッドの場所を変更することを優先すべきです。
 - b) 標準感染防御(手袋)無しで傷病者接触を行う。
素手での接触(特にCPR行為)は、超緊急時あるいは他に選択肢のない場合に行うべきであり、今回はそうした状況には該当しないものです。各処置のあとに手指消毒を行うのであれば、やむを得ず許容されるものと考えます。
 - c) 口腔内異物の掻きだし後は、手袋は交換してCPR活動をするべき
 - d) 愛護的な接触と病態悪化の抑止
溺者を水中から浜へ引き上げた後、一気に監視所前まで搬送してCPRを行ったチームがありました。確かに本部近傍の方が活動しやすい面もあります。但し、これは最初から患者はCPAで、かつ頸部損傷の評価を不要という前提での行動に見えてしまいます。また、溺者へのCPR時、クラゲ刺傷者からその活動はすべて見える状況であり、「患者本位」かつ「傷病の悪化を最低限に抑止する」という視点がどこまであったか疑問です。確か審査員評価が良かった記憶がありますが、医学的視点からすると複数の疑問点が残ってしまいます。「迅速性」だけではなく、「愛護的」というプロとしての意識も今後LS各自が持っていたいただきたいところです。

【シナリオ関連】

- ・ 今回の救急隊役が通常の業務と同様に活動できていたので、臨場感はLSにとっても経験できたと考えます。一方ですべて救急隊がLSに対して誘導をしてしまうと審査の観点から考えると審査会の主旨がぼやけてしまいそうです。あえてLSからの発言、提案を待ってから救急隊は行動しても良いと思います。
- ・ 溺者のバイタルサインの「カンペ」表示について、まずはLSがA→B→C→Dの流れで評価をしてから表示してもよいと思います。溺者に対して、CPRが本当に必要であるのか、あるいは回復体位で逃げ入れるのか、または気道確保で十分かという基本的な傷病者の病態評価を行うことも、実は現場では一番大事な評価になります。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

- ・ 今回、溺者役が死戦期呼吸を表現していましたが、ほぼすべてのチームがそれを認識していないように感じました。実際に脈拍をしっかり評価していれば、想定上すぐCPRには行かないはずですが、つまりCPRの適応かをLSがしっかり判断する能力をつけることも大事な一面かもしれません(かなり、高度な設定になりそうですが、実際の場面の多くがこうした判断に悩む境界線上の溺者のはずです)。
- ・ 上記記載の通り、各LSの能力が向上していることから、初級編とアドバンス編に分けても良いのかもしれませんが、後者であれば、より溺者の病態観察に特化したシナリオでも良いと思います。

【医学関連】

- ・ 今回、MDの中でも議論になりましたが、やはりフィードバックの機会が少ない印象です。練習を通して、もっと様々な疑問や確認事項が出てくるはずですが、もしこうした疑問点が出てこないということは、その時点でもしかしたらシナリオ慣れしてしまっているのかもしれません。
- ・ 審査会の効果もだいぶ浸透してきており、次は指導者に対する指導の段階に移行してきている感じがします。病院前での活動の大前提の一つは、「現状より病状を悪化させない」ことです。指導者はすでに救助のスキルはしっかりLSに伝えられているようです。次は病態や疾病の特性、医療行為の意義などについても正しく理解してから指導する必要もありそうです。



第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

実行委員長 溺水防止救助救命本部副本部長 所感

菊地 太 溺水防止救助救命本部副本部長、第5回JLAシミュレーション審査会実行委員長

まずは第5回目の審査会に参加して下さった多くの皆様に感謝いたします。

今年度の審査会は全国5カ所を計画していましたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、千葉県夷隅郡御宿町須賀 御宿海水浴場と神奈川県三浦郡葉山町下山口 大浜海岸の2カ所での実施に至りました。

御宿海岸は雨降る中で、感染対策を講じるなど実施にあたり厳しい環境下の中でありました。また、大浜海岸では、多くの係員が関わって下さり注目度の高さを痛感し、各地域の消防行政、各県庁、支援して下さった企業様、地域のライフセービングクラブ様からのご支援、ご協力がなかったら成り立たなかったと、深く感謝申し上げます。

一方、今年度は、開催できなかった地域の方々含め、リモートでの審査会の振り返りを実施し、各クラブの活動記録から見えてきた検討事項などを、2021年度の夏期海水浴場の水辺安全管理に反映させて頂ければと願ってやみません。

JLAシミュレーション審査会は今後も引き続き、数多くの地域で実施していきたいと希望しています。

【効果として】

1. 各地域の消防行政と親睦を深め、相互理解を得ることにより有事対応に連携が図れる。
2. 実施チームの感じる緊張感は、実災害のそれに近い状態を作り出せ、そこで得た検討推奨事項は、今後の活動に反映させる事ができる。
3. 多くの参加者によってマスメディアへの注目度が高まり、社会的にライフセーバーの活動実態が広報される。
4. 他浜の活動実態を見学することから、使用資器材や連携技能、公的救助機関との引継ぎや連携行動の確認が可能となる。
5. 各公的救助機関からの講評を頂いたことにより、我々が引き継ぐ相手が、どんなことを求めているのか知り、今後の活動に反映できる。

各公的救助機関には、我々ライフセーバーの普段の対応を知ってもらう機会になり、グランドデザイン2061に掲げている、公的救助機関との連携強化の第一歩となったと強く確信しています。

各審査会実施地域で、実施後の振り返りを現地で行っているチームや、クラブごとに、この冬に間に振り返りの検証会などを行っていると感じています。

このことについて、自身のライフセービング活動に向き合う向上心の高さに感銘しております。

実施者が入れ替わり、同じ想定を複数回実施することで、検討推奨事項を目の当たりにすることができる。一堂に集まりシミュレーション審査会を実施することは、実施者、審査員、係員、エキストラのすべての方々にとって、多くの気づきがあり、ホームビーチで活かせる術を持ち帰れたのではないのでしょうか。

最後になりますが、地域クラブから選抜された審査員の【検討推奨事項】は、各浜で長い歴史ある監視業務を先人から受け継ぎ、今日まで多くの経験に基づいて構築された貴重な物とらえています。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項に示した『エキストラ所感』『審査員所感』は審査員などから取りまとめた【検討推奨事項】となりますので、『メディカルダイレクター所感』と同様、熟読して頂き、今後のパトロールに活かして頂くことが、審査会の根幹であり、運営側から切望するところであります。

今後も、皆さんと一緒に審査会の運営自体も検討し、大きな効果を得られるようご協力のほど宜しくお願い致します。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

実行委員 所感

小林 俊樹 ライフセービングシステム開発委員会委員長

昨年12月中国武漢で原因不明の肺炎患者が確認され、年明け1月には世界保健機関(WHO)が新型コロナウイルスを確認、2月には感染が確認された乗客を乗せたクルーズ船が横浜港へ入港しました。3月にはWHOから世界的流行を意味するパンデミックが宣言され、2020東京オリンピック・パラリンピックの延期が決定されました。4月には全国7都府県に緊急事態宣言が発令され、5月には夏の全国高校野球選手権が中止となりました。人と人との接触は大きく制限され、人々の生活は一変しました。そのような中、私たちライフセーバーが活動する夏の海水浴場も全国各地で開設中止が余儀なくされ、ライフセービング活動も大きく制限を受けました。

第5回JLAシミュレーション審査会を開催するにあたり、JLA 溺水防止救助救命本部では、(1)審査会中の新型コロナウイルスの感染防止対策を徹底すること(2)審査会想定を「感染防止対策」とすることで今後のライフセーバーの監視救護活動の一助とすることが大きなテーマでした。(1)は審査会を含め今後の当協会の各種事業を推進していく上での課題として、(2)は当本部から発表された「COVID-19 ガイドライン② 水浴場監視救護活動ガイドライン」に則り、ライフセーバー自身が身の安全を確保できるかが試されました。

今回、次番者テントの責任者を務めさせていただきながら、上記の課題を踏まえ、新たに設置した検温ブーステント、実施者テント、統括審査員の一部業務を担当させていただきましたが、特に検温ブースにおいては、2週間前から当日審査会に参加するすべての関係者への検温実施の依頼(チェックシートへの記載)、審査会当日はチェックシートの回収と非接触体温計での検温、また検温済みの関係者を一目で識別ができるリストバンドの着用をルール化させていただきました。その他、当日の検温結果において37.5度以上の発熱や体調不良を訴えた方の為の隔離テントも設置し万一の事態に備えました。次番者テントでは例年同様、実施者に対しての注意事項の伝達、AED トレーナーの取扱い説明のほか実施チームの写真撮影、当日のメンバー変更も踏まえ、実施者全員の記名シートを導入しました。実施者テントでは、例年その任にあっている実行委員が職場のコロナ対策の関係から審査会参加の許可が下りず、要員の選定に苦慮しましたが、経験豊富なベテランライフセーバーと若手ライフセーバーを起用することで運営の安定化、迅速化が図れました。また統括審査員の任務は多岐に渡り、審査会全体の進捗管理、タイムキーピング、全審査員への審査要領の説明、エキストラ演技指導、消防指令役など多忙を極めるが、今後も他の委員が任務を遂行できるよう段階的な引継ぎを行っていく必要性を感じました。

最終的に御宿会場4チーム、葉山会場10チームの計14チームが様々な障害を乗り越え、コロナ禍での審査会に参加して頂いたことに、実行委員の一人として改めて感謝いたします。またこのような社会情勢の中、快くご協力いただいた夷隅郡市消防本部、葉山町消防本部、第3管区海上保安本部並びに各地域ライフセービングクラブ、後援・助成を頂いた各機関、協賛企業、関係各位に深く御礼申し上げます。引き続き新型コロナウイルスの感染収束は先が見えない状況ではありますが、私たちライフセーバーも社会に必要な存在として更なる研鑽を続けてまいりますので引き続きご支援ご指導の程よろしく申し上げます。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

防災対策室長 内田 直人

10/24 葉山会場 シミュレーション審査会 実施者テント報告

実施者テントスタッフ:坂本、城田、谷川、相馬

責任者:内田 合計5名

目的:各チーム実施者が使用する資機材を、同条件となるように準備する。

業務:借用者から借用資機材の受取り・資機材の状態確認/数量等の実施前後の検品・借用者への返却。資機材の回収、洗浄、消毒、設置、点検(10クラブ参加、10回実施)。実施前後の資機材の準備・片付け など

○良かった点

- ・ スタッフに対して、実施者テントの業務内容をレクチャーし、一連の流れを事前に実際に経験し進めたためスムーズに進んだ。
- ・ 時間通りスムーズな進行に貢献できた。
- ・ スタッフ同士がほぼ知り合いのため、スタッフ間のコミュニケーションが良好で、意思の疎通が上手に図れた。責任者からの依頼も気を遣わず依頼ができた。
- ・ 消毒等感染対策を徹底できた。
- ・ 資機材の紛失や破損がなかった。
- ・ スタッフそれぞれの役割分担がしっかりされていて動きやすかった。
- ・ 資機材を2セット+予備、用意したことによって回転が良かった。
- ・ 実施者テント2張のうち1張を監視本部テント、もう1張を資機材準備及び予備資機材置き場所とした。また、資機材準備・作業が手順良くできるように各種資機材を動線に合わせて配置した。
- ・ 実施者が予備資機材を使おうとしたり、テント内に入って来ることがこれまでであったため、監視本部テントと資機材準備及び予備用資機材置き場用テントの距離を1.5mほど取ったため、間違いが生まれなかった。
- ・ 事前にJLA資機材を携帯で撮影し、各スタッフ実施前に覚えて携わったため、JLA資機材とクラブ持ち込み資機材の区別・整理を各回行うことができた。また、分かりづらい資機材についてはテープを巻いて分かるようにした。
- ・ お湯については、ポリタンクに入ったお湯とポットに入った熱湯を多く準備していただき、余裕持って準備することができた。また、お湯の保温用の毛布も多く準備していただいたため湯温低下を比較的抑えることができた。
- ・ 同形状のポリタンクを2つ準備していただいたため、ポリタンクのお湯のつぎ足しが楽に行うことができた。また、湯温コントロールもスムーズに行えた(ポリタンクの注ぎ口が大きいため)。
- ・ スタッフ1名にAED回収を依頼し、毎回車内搬送場所まで取りに行ってもらった。
- ・ 実施後の資機材回収・洗浄・消毒・設置・確認等のルーチン業務は2.3回(チーム)実施で、スタッフの理解が図れた。

○改善点

- ・ トランシーバーのアクアパックの代わりにジップロックで代用した点で、競技者が少し使いづらそうに見えた。※落水してしまった時のため、必要なことですが、また、ジップロックを括る輪ゴムも本部になかったため、参加しているクラブから急遽いただいた。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

- ・ 想定終了のトランシーバーによる連絡が無かったため、機材回収のタイミングが遅れることがあった。
- ・ 想定終了の合図が砂浜へは全く聞こえず、実施者テントの入れ替え作業に入るタイミングが遅れることがあった。全体に分かるように伝える工夫をしてほしい。
- ・ 10チーム目の実施最中、シーバー1台が見当たらなくなり、持っていると思われるチームに確認したところ、クラブ代表者や複数人から「持っていません、こちらにはありません」の一点張りだったが、結局そのチームの荷物内から発見された。
- ・ 持ち込んだ機材の確認だけでなく、持ち込み以外の荷物が混ざっていないかの確認の徹底を呼びかける必要があった。また、最後お借りした資機材の返却時、双眼鏡について1つ見当たらなかったが、こちらも別途返却しており、クラブ内の荷物の中から見つかった。因みにどちらも本件は葉山LSC。
- ・ トランシーバー、AED、チューブだけでも、想定終了後、必ず実施クラブから直接実施者テントスタッフに渡していただくようできないか？！※時間がかかる過程にはなるが。
- ・ 実行委員長からのトランシーバーの連絡が非常に聞き取りづらい。作業中でもあるため、それによって現場に焦りが生じた。シーバーを所有している責任者は作業に掛からなくするためにはスタッフ数がより必要。
- ・ 審査中に警備本部となるテントと資機材準備用テントの区別をもう少しわかりやすくしたい。準備の関係上これ以上テント間の距離を離すことはできないので、テントの色を変える等で対応できないか？

○その他

- ・ 当日の段階で、AEDトレーナー内に実機パッドを入れ、実機パッドによるBLS手技の依頼があった。そのため、回収・清掃・パッド交換・設置の作業が新たに加わったものの、スムーズに進んだ。また、未だAEDトレーナーを砂浜において使用するからか、AEDトレーナー内に砂が多量に入って戻ってくるチームが多かった。このあたりは事前・事後に各クラブに徹底しても良いかと思う。
- ・ 事前事後、当日実施前後など全ての業務や動きを掌握している担当や事務局員が必要に思う。また、全体を統括する担当委員長がエキストラ役を担わないようにスタッフの確保をしてほしい。
- ・ 本部メンバー及び事務局の当日の動きが、事前に互いに理解できていると良い。



第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

【傷病者記録票とは】

あくまでも救急隊現場早期出発のツールの一つです。どんな狙いか。

傷病者記録票を救急隊に渡さずに、一つ一つ説明していたら2人で1つの事をしている。名前だけでも、性別だけでも、救急隊が到着するまでに聴取できることを記述し、救急隊が到着したら、『すぐに』傷病者記録票の1枚目を手渡し、記載されている内容では分かり辛い事項のみ口頭で補足申し送りする。多く記述されていれば救急隊が助かるのは言わずもがなです。

後は書いてある通り

だから、さっと傷病者記録票を渡したライフセーバーは、違う作業に取り掛かれる。それが救急隊現場早期出発に寄与できる一つです。

可能なら、関係者に傷病者記録票を手渡し、書ける項目は自分で書いてもらい、ライフセーバーは違う作業もできる可能性も模索する。

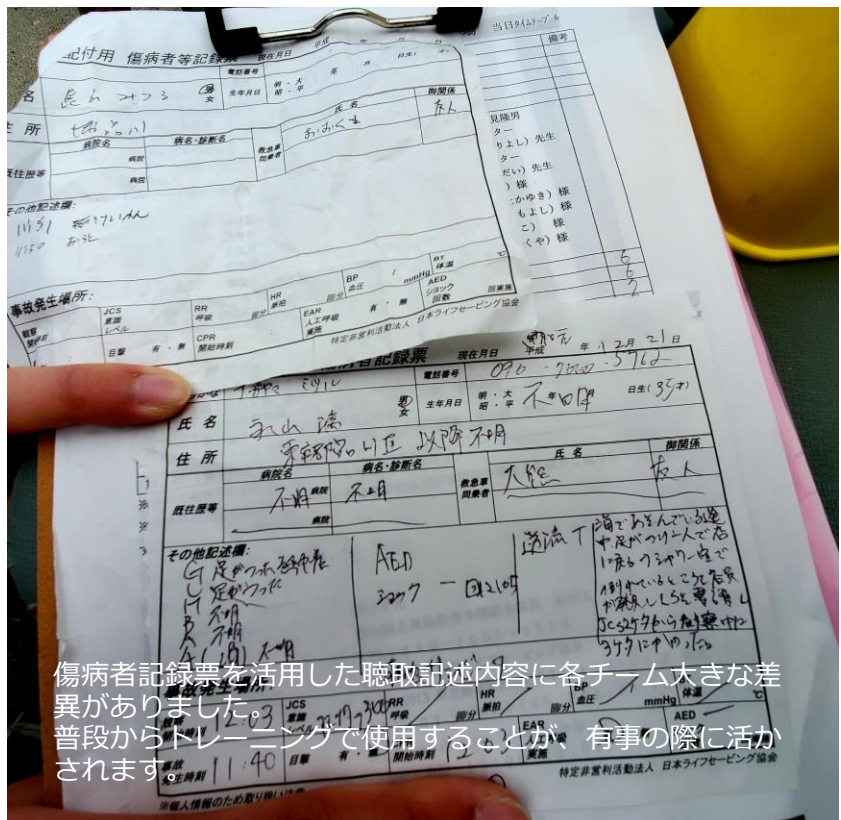
救急車が早期出発するには、

- ① 傷病者の帰りを考えて靴や着替え荷物を集めておく
 - ② バックボードやスcoopのストラップを早期縛着準備しておく
 - ③ 観衆の整理など、導線の確保
 - ④ 関係者の確保
 - ⑤ 関係者の荷物の確保
 - ⑥ 継続監視が手薄になっていないか
 - ⑦ 海の家に配慮の報告
 - ⑧ 役場や雇用主に配慮の報告
 - ⑨ 警察官など他の機関への報告
 - ⑩ 水浴場観衆の動揺の整え
 - ⑪ ライフセーバーの使用資器材の通常体制への早期復帰
 - ⑫ 救急隊の資器材で現場に残したものがないかの最終確認と救急隊に報告
 - ⑬ 傷病者が呑んだであろう薬袋の確保
 - ⑭ 傷病者が呑んだであろうアルコールの本数などの聴取
 - ⑮ 傷病者の既往歴やかかりつけ医療機関の聴取
- 他にもやれることはまだまだたくさんあります。

全ては、多角的視野で、1人でできることを複数でやらないチームワーク。

つまり、【傷病者記録票】は一つの手段であって、それがメインではない。

救急隊が現場早期出発のために寄与できる、多くある手段の一つです。



傷病者記録票を活用した聴取記述内容に各チーム大きな差異がありました。普段からトレーニングで使用することが、有事の際に活かされます。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

エキストラから気づいた実施者の動き 所感

要救助者役 安達雄太

想定:溺者 レベル300 意識なし

感想:

ライフセーバーは意識のない人を一刻も早く溺者を引き上げ、心肺蘇生を行わないといけない…という気持ちがあるので、焦りや多少の荒い動きがあるかと思う。自分も実際にあの環境化でレスキューを行ったらそうなるかもしれない。ただ、「意識がない＝痛みがない」ではないので、そこをもう一度、再確認し、溺者の扱いを考える必要があると思った。今回、溺者役をやったことで、生体で行う怖さを感じた。

引き上げ

- ・ 引き上げの際にしっかりと溺者に対して密着しているチームは無理なく引き上げることができていた
- ・ 腕の力だけで、脇から手を入れての一人ドラッグ、溺者の顔がレスキューの胸くらいのツーパーソンキャリアは溺者に痛みあり。一人で無理をして引き上げるより、応援がくるのであれば待つてからのほうが安全に行えるのではないかな。
- ・ ツーパーソンドラッグで長距離を運ばれるときは腕がもげそうだった。生体で力を入れて回避していたから大丈夫だったが、本当に意識がない場合は関節が危ない気がした。
- ・ ツーパーソンキャリアでお姫様抱っこのように引き上げたチームもあり、これは安定して良かった。

砂浜にて

- ・ 引き上げられて寝かされる際、葉山の砂浜が少し傾斜になっていたため、常に傾いている身体の動きになっていた。これがスタンダードの姿勢になるので、かなり辛い。更に、口内清掃で横にされ、戻されたときに、上半身は戻っているが、下半身はねじれていることが多々あった。またバックボードの上で手技を行っていたチームは、途中から右半身はバックボードの上、左半身は砂浜といったような状態になっていた。これはかなり辛かった。バックボードの上での処置を諦めて砂浜におろしたチームもあった。こちらは良い判断だと思った。
課題として…身体が斜めを向いている⇒溺者の姿勢として辛い姿勢ではないか？極力、つらい姿勢になっていないか気にかける必要がある。同様に、身体がやや斜めな状態での圧迫⇒効果的に圧迫できているか？を意識しておこなう必要がある。

口内清掃

- ・ 実際にやられてみて、意外と口の中に残るので、しっかりとかきだすことが必要。
- ・ 首を無理に曲げないで、身体と一緒に…。
- ・ 作業用のゴム手袋をしていたチームがあった。口に優しくてありがたかった。タオルのチームもあり、うまく吐物を絡みとっている感じがあった。感染防止用手袋だけよりも口には優しいと感じた。
- ・ 心配なのは、今回の審査会で使ったものは「きれいな物」だったのか？そのあたりが気になる。運営側としては、事前の注意事項として『生体にやるのだから口に入れる物などは、できれば袋に入っている「未開封のもの」「未使用のもの」にしてください。』等の注意事項を促しても良いのかもしれない。安全にエキストラをやるためにも確認を。現在もやっているのならごめんなさい。

AED

- ・ 砂のついた身体をタオルで拭かれる痛さを思い知った。このあたりも知っていると配慮に繋がるかも。
- ・ パットを確実に貼れていない。貼りなおしたチームもあった気がする。イメージとしては心臓を3Dのイメージで挟むことをもう一度、確認したほうが良い。
- ・ 今回は前回の御宿のようにAEDデモ機と本物のパットの連動ができていなかったため、電気ショックをしたようなしていないようなチームがあった気がする。リアリティを追及するのであれば、御宿大会のような工夫は必要かと思った。

搬送

- ・ 手が落ちてブランブランなのは気をつけてください。首もグラングランにならないように気をつけてください。扱いを丁寧に。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

- ・ 毛布の上で処置をして、毛布ごとバックボードの上へ…身体の負担なく温かく助かった。
- ・ ツーハンドシートキャリアのような形で運搬されたときは肩が外れるかと思った。救急隊がいたのだから、無理してライフセーバーだけで運ぶ必要があったのか？溺者側としては、階段で怖いし、痛いし、揺れるしで辛かった。
- ・ 搬送されるときベルトの締めは意外と圧迫されるのだな…と感じた。

今回の審査会は御宿大会に続いて、海に入水しての溺者を置いた。審査会としては2度目。実際、やってみての感想だが、太陽は出ていたものの10月の水温と外気の気温を考えると、非常に厳しい寒さであった。その冷えた身体の中で、脱力をし、他者からの力を受けて…となると溺者の負担はかなりあるかと。またウエットスーツを着ていないので直接、肌にダメージも。こちらもリアリティを求め、真剣に行っているのに、極力動かないようにし、多少の痛みには耐えていたが、その結果、ケガに繋がってしまっただけでは何にもならないので改善策を講じていく必要はあると思う。

- ・ レスキューされる人のデメリットの把握
(ひっかき傷、無理な姿勢による身体のゆがみ、寒さ、脱臼のリスク、衛生面のリスク)
- ・ 元々、ケガのリスクがある人間をそのような役に置かない。
- ・ 寒さ対策でお湯を置く。
- ・ 衛生面のリスクは先ほど書いた通り。
- ・ 溺者役の複数人配置。
(終わってから次の回までの時間が短すぎるため、1回ずつ交代が望ましい。その間に保温もできる。)
- ・ リアリティは求めるが無理はしないという言葉かけ。姿勢が変だったり、圧迫で力を入れすぎたり、搬送の際、脱臼しそうなどのケガをしそうだったら回避してOK。

ざっと書いてみましたが、こんなところでしょうか。今回、実際に色々な人に扱われて、迅速に…大切ですが、人の身体は大切にしないと改めて勉強になりました。今後も素敵な審査会になりますように。



第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

【観衆役・関係者役・海の家スタッフ役】

【発見者】

《検討事項》

- ・ 溺者を海から引き上げる時、体についたサンオイルの影響で手間取り、運搬に苦労するLSがいた。
- ・ 発見者としてライフセーバー(以下 LS)が来るまでの時間はとても長く感じた。叫んでから本部テントからLSが到着してピックアップしてくれるまでは自分たちが感じている以上の長さかもしれない。
- ・ 救助に来たときのLSの言葉が早口。口調が強いと安心感よりも、不安や不信感が感じられた気がした。また専門用語で急に指示を出されると一般の方は混乱してしまうかもしれないと感じた。
- ・ 現場を離れないで欲しいと言われたまま放置をされるのはどうすればいいかわからず不安やイラつきが出てくると思った。

《推奨事項》

- ・ 波打ち際にパトロールのLSが出ていると有事の際にすぐに救助出来きて不安が少なく感じた。
- ・ 専門用語ではなく、チューブであれば「赤いのを持って一緒に来てください」など一見ただけで理解できる言葉をかけてくれるとわかりやすいと感じた。
- ・ 情報聴取の際に事故対応の現場から背を向けさせて話をしてくれて、後ろが気になる気持ちは確かにあるがそれでも多少落ち着いて話ができた。また言葉かけもゆっくり丁寧で昂った気持ちをゆっくり落ち着かせてくれていたと感じた。
- ・ 何をして、どこに来てくださいなど明確な指示、わかりやすい目印などを指して誘導をしてくれて動きに困ることなくこちらも行動することができていたと思う。

【クラゲ】

《検討事項》

- ・ お湯の温度が40度以上あったチームは1チームのみ。その他のチームはぬるい。
- ・ アナフィラキシー症状の説明はほとんど不十分。
- ・ ほとんどのチームが海水使用。(開始前に溜めておくまたは、受傷後再度海へ)
- ・ 砂浜に傾斜あり、椅子の置き方が不安定。
- ・ 拡声器は受傷しているのに不快であった。
- ・ 温める温度が低い所が多かった。
- ・ 「アナフィラキシーの可能性があるので」と告げられた際に、アナフィラキシーって何？と聞いても返ってくる情報が浅かった。
- ・ ジップロックにお湯を入れるチームがあった。負傷部分に当てやすかったが、温度下がりがやすかった。
- ・ バケツの形やお湯の量が少なく、負傷した全ての部位を温められていないチームがほとんどであった。
- ・ お湯交換する時に、お湯を手から取る時間が長かった。一度使ったお湯を足元に流していた。また、継ぎ足しにしている温度が緩いままのチームがいた。
- ・ 除いた触手を掘ったり袋に入れたりせず、砂浜に落としているチームがいた。

《推奨事項》

- ・ 体調が悪化してもすぐ対応できるように、ブルーシートに座るよう指示しているのはいいなと思った。
- ・ 温度計を使用して温度を測っていてよかった。
- ・ 実施チームの3分間の準備時間に海水温度を測りにきたライフセーバーが私たち遊泳客役に挨拶をしていて好印象であった。
- ・ 病院の情報を渡してくれるチームが多くあった。土日でもやっているかや診療時間など細かく教えてくれるチームもおりよかったと思う。

【観衆】

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

《検討事項》

- ・ 拡声器が必要ない状況で、拡声器を持ち続けるLSがいた。
- ・ 浴客が遊泳している状況の中、通常監視を続けるLSが一人もいないチームが散見された。
- ・ 役割分担が不明確なチームがあった。
- ・ 観衆整理でLS2~3人を割いているチームがあった。
- ・ 前のチームを見ていたからか、浴客に呼ばれる前から張り付いていたチームがあった。
- ・ 観衆を近づけないために砂浜に円を描くことは効果的だったが、観衆整理ができず、円の意味合いが薄れているチームがあった。
- ・ アクアラングやチューブのストラップなどが溺者役に付いたままで処置・搬送の邪魔になっているケースがあった。
- ・ 溺者から取り外した所有物(ネックレス等)が砂浜に残置されるケースがあった。
- ・ 溺者への配慮として、保温ができていないチームが多かった。
- ・ 優先すべきはAEDだが、いくつかのチームでAED装着までに時間がかかっていた。
- ・ 溺者の逆流対応をした手で観衆を制止する動作があった。また、直接「べたっ」と触られてはいないが、吐物を触れた手、という意識が低いように感じた。
- ・ 感染予防をしているが、LSたちへの予防という意識が先行し、清潔不潔の意識があまりない。
- ・ バックボード固定の際の、溺者への対応が多くチームで雑。また、正しくバックボードに乗せたり固定できたりしていない。バックボードに関しては、基本をもう一度確認してほしいと思うことが多かった。
- ・ 傷病者記録票の一枚目をきちんと救急隊に渡していたチームが少なかった。
- ・ 毛布を効果的に使用できていない。目隠しするなら誰に対して？どこで持つといいのか。寒くて震えているなら下半身などにかけてあげてもいいのでは？と感じた。
- ・ 実施チーム全体的に、意識のない傷病者に対して何を優先すべきかの意識が弱い。
- ・ ライフセーバーの手に余裕があるように見えたものの、観衆対応をおざなりにしたチームがあった。
- ・ 溺者発生とほぼ同時に、海の家(エキストラテント)にライフセーバーが来て、この場所を処置のためにあけて欲しい、という依頼をしてきたチームがあった。雨が降っており、AEDのショックを実施する際など、濡れない環境でできるので、発想はとても良いと思ったが、実際の現場において、海の家でテーブルや客をどけてもらい処置をするのが現実的かどうかは、それぞれのパトロール環境によって違ってくる感じた。

《推奨事項》

- ・ 溺者に近づけないために、ライフセーバー一人をしっかりと観衆対応にあたらせたチームがあった。
- ・ 観衆にまで溺者が溺れた状況を見ていないか、しっかりと確認しているチームがあった。
- ・ 砂浜に線を引いたり、ロープで区切ったりして、観衆を近づけないよう、目印をつけているチームがあった。
- ・ 観衆に何度も断られながらも、サポート(目隠しや雨除け)を繰り返しお願いし、最終的には、観衆からサポートを受けているチームがあった。

【OWS】

《検討事項》

- ・ 実際の現場でもし遊泳者全員を浜にあげる対応をするのであれば、数名が入水をして案内をしなくてはならないと感じた。(泳ぎ続けていた場合ボードで止められでもしない限り気付きにくい)
- ・ その労力をさくのか、素直に数名(最低2名か?)を監視として区域のガードに残して黄色旗など波打ち際へ遊泳者を案内し監視体制を残すのか。
- ・ どちらにせよ労力をさかなければならないのであれば赤旗にするほうが一時の手間とパワーが必要なこと、その後も一般遊泳者の案内も必要になる可能性があるといった心配があるのではないか。

【溺者】

《検討事項》

- ・ 水辺からのドラッグ運搬、しっかりホールド出来ていないチームは溺者を落としていた。
- ・ 観察、傷病者の表情確認する事なく、ゴーグル付けたまま運搬。とあるチームは運搬時にゴーグルがずり落ちてきて口と鼻を塞ぎ呼吸できなかった。
- ・ AED措置ネックレス引きちぎったチームあった。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

- ・濡れた体をタオルでおもいきり拭き取っていたチームあるが、あかすり状態で痛かった。
- ・嘔吐処置していなかったチームあり。救急隊が実施してくれた。

《推奨事項》

- ・全てのチームがしっかり声を出せていた

【関係者】

《検討事項》

- ・パニックになっている同伴者に傷病者の情報を聞き出すときに男性よりも女性の方が接し方が優しく落ち着ける感じがした。
- ・傷病者記録票は全チーム記載していた。しかし、しっかりと記入し救急隊に渡していたチームが1チーム？と非常に少なかった。
- ・溺水者に駆け寄ったパニック状態の同伴者を確保せずにいたチームが2～3チームあった。
- ・救急隊に引き渡すときに、傷病者のコロナ感染が判明したときにライフセーバー側に連絡をほしい旨を付け加えていたチームは無かったように感じた。(聞こえなかっただけかもしれないが。)
- ・あるチームは、本部テント前にブルーシートを広げてその上に救助資器材を並べ準備していたが、夏の海水浴場設置期間でもこのようにブルーシートを広げ救助資器材を設置しているのかと疑問に思った。海水浴に来た来場者には、ものものしく映ると思う。
- ・パニックになった同伴者に救急対応している状況を見せないように無理やり逆方向を見させようとしていたチームが複数あったが、逆効果(傷病者を気になって落ち着けない状況になる場合もあり)の場合もあるので、状況を判断し選択をするようにした方が良いと考える。
- ・同伴者なのか、ただの観衆なのか、を瞬時に判断するスキルが必要と感じた。
- ・AEDを持ってこなかったチームが1チームあった。

《推奨事項》

- ・救護協力していただけた一般市民の方に救急隊の誘導をお願いする際、目立つ旗を持たせて救急隊の誘導指示をお願いしていたチームがあった。
- ・パニックになっている同伴者をまず座らせているチームが良かった。これにより落ち着かせられることや、どこかに勝手にいかないような対応が出来ると感じた。
- ・それぞれのライフセーバーがお互いに進捗状況を確認しあっているチームは対応の流れがスムーズに進んでいた。

【救急隊役】

《検討事項》

- ・観衆対応に必死になり、処置が遅れているチームがあった。
- ・バックボードの持ち方が上から掴んでいたたり、片手だけであったり、両側左右対称でなかったチームがあった。
- ・救急隊が到着しても申し送ることなく、また、バックボードに乗せることもなく、自分たちだけで搬送して完結し、救急隊との連携を全く行わないチームがあった。救急隊としっかりと連携しなければ病院への引き継ぎまでが遅れるため、審査会の意味を理解していないのではと感じる。

《推奨事項》

- ・仲間同士声を掛け合い、救急隊の要求にもしっかりと答えて対応していた。
- ・監視長を中心に指揮がとれていて、救急隊とLSの連携がしっかり取れていた。
- ・拡声器を使うことにより、その場にいる全員が情報を周知することができ、上手くまとまっていた。
- ・骨折の完全保護ができていたのは2チームのみ。3割は何もできず、3割は固定が弱い(固定力が弱い、固定部位が長骨のみ)。8割はバックボードに載せる際に仰臥位にして、患部を大幅に動かしてしまっていた。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

推奨事項(対応が優れており、推奨する手技)

監視長

- ・ 本部に残ったメンバーへの的確な指示が必要。視野を広くもってほしい。
- ・ 役割分担をはっきりしてメンバーに任せるといふ気持ちが大事です。
- ・ 事故現場だけでなく、全浜に於ける客人に対する注意の配慮ができていた。
- ・ 本部(現場)に限られたメンバーを有意に配置・対応できていた。
- ・ 現場(本部)統制の十全対応に各 STAFF の行動に緊張あり。
- ・ 観衆を協力者にしたことはよかったです。
- ・ 関係者を初期の状況から確保し、人定状況を聴取したことは大変良かった
- ・ クラゲ処置用の湯温を水温計を使って 40°C以上となるよう管理していた。
- ・ 全体の統制、指示出しができていてよかった。全体の把握に努めていた。
- ・ ロープを張って立ち入り制限をしていた。胸骨圧迫のリズムをメロノームを使うよう指示していた。コロナ対策がよかった
- ・ CPA を通知した時点で、ビーチクローズにしたのはよかった。
- ・ 現場リーダーとのシーバーのやり取りが正確だった。テント内での消毒をしっかりと行っていた。最後までテントに残り指示を出していた。
- ・ 全員が”何をするべきか”を理解していて、キャプテンの指示が必要ないくらいだった。
- ・ 拡声器を使用して指示出し(伝達が容易となっていた)。溺水の知人を本部に向かわせた(情報収集場所を集約)
- ・ メモを常に取っている(引継ぎ用、事故情報)監視員の主体性が良く、監視長がそれらをうまくマネジメントしていた。
- ・ 笛を使用して遊泳者を呼びもどしていた。
- ・ チームの士気が高かった。事故現場の人員を状況にあわせて変えていた。現場から戻った監視員が水で身体を洗っている(感染防止)。
- ・ 駐車場の位置を正確に伝えている(ホームビーチではないのに)
- ・ 資器材の準備ができている。本部の通報役と統括役が分担されている(それぞれの役割に集中できる)。必要最低限の処置を行い、継続監視に移行している。
- ・ レスキュー×3を笛で知らせていた(簡潔で分かりやすい)。監視長でも必要と判断したら拡声器を使って遊泳者を呼び戻そうとしていた。
- ・ 監視員が浴場の状況を把握できるようにするためか、傷病者を陸向きに座らせて対応していた。タイムマネジメントを監視長がやるなど、役割分担が明確だった。
- ・ 海の状況を事前に把握させていた(インフォメーションボードとして遊泳者に提示した)。ビーチパトロールに全体監視を任せて、消防への連絡などを行っている。(他の監視員への支持は継続)。
- ・ 5水、気象情報の把握。使用する衣類をハンガーでかけておくなど、資器材の管理方法が良かった。監視長の指示が的確。医療関係者がいるか確認を早い段階で行っている。状況を逐一周知。本部前で CPR を行わせるのは全体統括の観点からはとても有効。指差し確認の徹底。
- ・ 本部内の傷病者に対して最後まで気配りをしていた。
- ・ 机の上にお湯タンクを置いてチョロチョロ掛け当てながら温める方法も良かった。
- ・ FA の説明がしっかりしていた。
- ・ 誘導用の旗を持たせたのは良かった。
- ・ 毛布を使ったバックボードへの移動がスムーズだった。
- ・ 囁きライフセーバーのことを伝えて大きく口を動かして話すよう伝えていた！全体的に落ち着いていた。
- ・ 監視長の声が響き渡り、指示に対する反応は必ず返ってきており、ない場合は必ず確認していた。
- ・ 周囲メンバースキル経験高く、長をサポートしたチームワークが良い。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 沖合スイマーもケア。監視長から常に話しかけている、状況把握。パーソナル情報、感染対策の徹底。申し送り情報の確実な救急への伝達確認。誘導時、一般へのケア事項伝達。 ・ FA1 名を適宜サポート(患者に声掛け安心させ)していた。CPR 現場と無線取れない(かかりきりで反応ない)時の対応を想定していたか。 ・ バックボード、AED の本部での再チェック。声掛け。海況現場からの情報(無線)なし。監視長が目視で救急判断。FA 一定処置で対応なし→通常監視→その後もどし再対応。本部に救急通報・記録係をスタンバイさせ監視長がフリーで動ける対応。 ・ 溺水対応を監視長、みながもクラゲ FA サポート。沖のスイマー誰もケアしていない(人手もない)→監視長自らメガホン→スイマー聞こえず(人もいない) ・ 海辺チェックを複数で声掛けあい。監視長が各自の役割指示。クラゲの指示。救急要請あり。重溺に監視長自らサポートに(FA に引継、感染予防あり)。メガホンし一般制御誘導。先導。重溺をかくす。 ・ 常にトラメガを使用し、近づかずに指示をしていた。 ・ 常にシーバー等活用し、状況把握を徹底していた。監視員のレベルも高く、冷静に対応し、信頼関係が築けていて。 ・ 全体的に冷静に対応できていた。傷病者にもマスクさせるなど徹底されていた。 ・ 中々うまく応答がなかったが、現場の状況を把握することに努めていた。 ・ 人が足りていれば随時人を配置に戻して、効率よく回せていた。 ・ 監視が抜けてしまっていたが、人に余裕が出たら戻るよう指示できていた。 ・ 泳者がいる中で、全体を把握しつつ、状況に合わせた配置換えが的確でした。 ・ 監視員・救急隊ともに明確なコミュニケーションを取り、常に声掛け指示が出来ていた(次を想定した指示が出せていた)
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">監視員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 周辺の声掛けは十分であったと思う。 ・ チーム一丸となった対応だった。初期対応がとても早かった。救助と観衆対応が明確で、現場を仕切っていてまた公的機関との申し送りが適正だった。 ・ 傷病者記録票を活用していた。 ・ 一次発見者、友人への配慮。傷病者記録票を活用していた。 ・ 感染対策をしっかりと検討し、実行していた。 ・ 準備 30 秒前。タワーキャプテンが冷静に対応できていて、シーバーの情報共有もしっかりできていた。 ・ 胸骨圧迫している人の声の大きさ、情報をわかりやすく正しく、端的に伝えられていた。準備 20 秒前。意識・呼吸確認から胸骨圧迫、AED、消防の流れなど、手技がよかった。 ・ 準備 30 秒前。ガウンを着るなど、感染防止策はどこよりもできていた。気候チェック良。 ・ 友人へのアプローチ良かったと思います。役割分担が適切にできていたと思います。 ・ 消防との連携はしっかりと取れていたのもそこに内容が加われば良いと思う。 ・ 関係者と話す際に、隣に立つことを心掛けていた点。(マスクをわずかに外すところも見つけられたが)マスクで声は通りづらかっただろうが、落ち着いて確保ができていた。→救急車への申し送りは早かった。 ・ 何をするか迷う者がいないことは重要である。監視長の指示、感染予防にも留意されており、余裕があった。安心感があつた。 ・ 防水シート雨対策。圧迫者が傘で傷病者に水があたらないように配慮していた。 ・ ユニフォームの下にロングスパッツを着用し感染防止に配慮。 ・ クラゲ傷病者にマスク。 ・ トラロープで傷病者に近づけないようにしていた。 ・ コンディションを最初に確認していたのは良い。 ・ リーダー指示の強化 ・ CPR 中の傷病者の口の上へ布カバーをするべき。 ・ 感染防止への配慮はなされていた。 ・ ブルーシートは良いが(一面的)。同時に日陰を作れたら尚良かった。 ・ 処置現場(砂に円を書く)

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

- ・ タオルは良いが、日陰をつくって欲しい。
- ・ 一般人に救急隊の誘導を指示していた。
- ・ スタート時からのP位置。ドラッグは良いが、溺者への負担に？
- ・ 救急がついている移送にまで監視長。
- ・ クラゲの毒の説明をしっかりとできていてよかった。病院の場所を書いたメモを事前に用意して渡していた。
- ・ クラゲ対応ですぐに触手を取ってお湯に浸けていて良かった。
- ・ お湯がぬるくなることも考えて伝えていて良かった。FAにつきっきりではなくしたのも良かった。
- ・ 触手をすぐに取り除いていて良かった。海見ながらFAも効率的でいいけど、片手間なら浜上げさせた方がいい。
- ・ お湯の温度が一番良かったそうです！（傷病者談）
- ・ 落ち着いていても士気が高いのが伝わってきた。間違った処置が一つもなかった。
- ・ 笛で知らせるのは良かった。
- ・ 1人は溺者から目を離さずに対応し、人が少ない中まわりを見て足りていないことに対応できていた。
- ・ バックボードより頭を上を持っていくことで気道確保ができていた。頭部側の人全体が見られていて良かった。
- ・ 袋を頭の下に入れているのは良いと思う。毛布で保温もできている。（搬送時）
- ・ 全体の連携・声掛けがとてできていた。
- ・ マフラー型のマスク着用（黄・赤色）
- ・ パトロールはゴム手袋、フェイスガードを事前に着用してのパトロールにあたっている。
- ・ ナイロンカップを着用してのFAができていた。溺者の状況を本部へ無線連絡は早い。
- ・ 普段からメンバー間のコミュニケーションができていた。あわてない。ゆっくりとしかし大事な所は早く、そして確実に行っていた。
- ・ 感染予防として、マスク+フェイスガード+手袋の3点をそろえて着用し、対応していた。
- ・ 溺者発見・確保長音1回、笛を吹く→仲間への気づき（注目させる上で）良い。
- ・ 泳者への注意喚起笛（短音/1回 or 3回）
- ・ 溺者と一緒に海を退水。監視長本部に残り、浜全体を把握しておくことができる。本部にクラゲ対応のライフセーバー2人のみ、他は1人もいない。
- ・ 時間経過とともにチームプレーが発揮できていた。
- ・ 通常時の監視体制が良好であった。
- ・ 溺者救助時に救助と救急の役割分担ができていた。
- ・ 救急資器材がコンパクトにまとめられていており、良かった。撤収も早く良好であった。
- ・ 観衆対応した時の声がよく出ており、観衆の統制が取れ、救急処置が円滑に実施できていた。
- ・ CPR時に観衆対応要員が不足していたことから監視長が状況を把握し対応にあたった。
- ・ 要救助者の口にタオルを置き、エアゾル対策ができていた。
- ・ 監視、救急、救助体制が確立されているチームであった。訓練練度が高い。
- ・ ガウン着てからクラゲ接触できていた。
- ・ 逆流対応やドライ対応ができていた。
- ・ 継続監視できていた。海の状況含め最初に確認できている。唯一平ら意識できている。
- ・ 斜め意識できている。注意しながら搬送できていた。
- ・ 救急隊への申し送りは比較的できていた。救急隊の指示に従い、協力活動できていた。関係者への対応が丁寧だった。
- ・ PPE装着は完璧。救急隊到着から現場離脱まではとても素早い。
- ・ 重溺覚知後、その他の遊泳者を引き上げたのは良かった。
- ・ 重溺者へのバックアップがとても早い。AEDの装着早い。
- ・ 胸骨圧迫開始早い。胸骨圧迫の中断時間短い。基本に忠実に、継続的なCPRができていたのは素晴らしかった。
- ・ 胸骨圧迫の中断も少ない。関係者の確保しっかりしていた。
- ・ 搬送→バイタルチェック→CPRの流れがスムーズ。毛布を使ってバックボードへ移し替えは良い。
- ・ リーダーが落ち着いて情報収集していた。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

- ・ 想定をすべて理解しているうえでの活動だと感じた。座位のまま口内清浄。
- ・ クラゲ傷病者への説明が良い(処置の説明。感染についての説明)。
- ・ CPR 感染対策ガウン、マスク、ゴーグル、よくできていた。活動全体的に観衆などに惑わされず手を止めずにできていた。
- ・ クラゲ海での洗浄がよい。コロナ対策について傷病者への説明が良い。
- ・ 長の管理体制がとても素晴らしかった。活動全体的に安心感があった。
- ・ 関係者の方を上手く利用していた。(毛布の活用など)
- ・ シーバーが圧倒的に多い。現場作る早さ。ファーストは一度戻り、感染対策できていた。混乱している現場の中でも、練習をしているのが他のチームに比べて感じられた。
- ・ 周りの人へマスクを着けさせる点は良かった。遊泳者への声掛けも行ってた。
- ・ 全体のまとまりがあり、日ごろからのチームワークを感じた。
- ・ 外国人に対して必要以上の対応をせず、多少失礼であっても対応に時間と人を割かないこと。救急隊からの指示を待たない。事故対応が終わった後スムーズに継続監視に移れている。
- ・ 感度チェックを必ずしている。バックボードに乗せるとき丁寧→乗せ返す必要なく、その後が迅速。
- ・ 本部で全員が遊泳客の状況を把握する(監視長が注意喚起をしている)。バックボードへの乗せ方を誤ったと思ったらすぐ外したこと→その後の胸骨圧迫を比較的正確にできる。しかし熱くなっている砂浜に直接置くのもどうか。救急隊到着後、ひとり本部へ戻り、次の継続監視に備えたこと。
- ・ 救急隊誘導を出せていた。しかし、手間取って友人を逃す。本部にだれも残さず全員現場へ行かせる。
- ・ 監視長が観衆を体で遠ざけつつ、拡声器で現場の指示を出す。毛布を使ったバックボードへの乗せ換え・搬送→スムーズだった。また保温もできていた。
- ・ パトロール前の海況確認、チーム員への周知。傷病者対応中も常に継続監視がいた状況。監視長は現場近くには行くが、プレーヤーになることはなく、現場←→本部どちらも見られるところを維持している。
- ・ ライフセーバーそれぞれ気づいたことをチーフへ報告→チーフが復唱。防護服の着用有無によって 1st,2nd,3rd のポジションを変えること&準備できたら交代すること。



第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

検討事項(対応に課題があり、改善検討が必要な手技)

監視長

- ・ 監視長がテントから離れてしまう場面(時間)が多く、自らがレスキューの一員となってしまった感がある。傷病者は2名とは限らないのでもっと海全体の状況を知ることが大事だと思った。
- ・ 溺者搬送で監視長がついていってしまい最終的に監視本部の指示及び全体的な監視がなくなった。
- ・ よくできていました。クラゲ対応でポットのお湯を使うのが遅かった。ポットがあったことに気づいていないのかと思い残念。後に対応できていたので良かった。
- ・ 関係者の確保、情報収集の大切さをチーム全体として共有してください。
- ・ 関係者の早期確保を忘れずに。
- ・ 傷病者の上をまたいでいた。
- ・ シーバーが多く、現場処置の邪魔になっている(適度に報告を待つことも重要)。ライフセーバー内で共通認識としている用語を公的機関・関係者に使っても通じないのでは(ピックアップ・重溺など)。
- ・ 監視長がCPAにはりついていたので、全体の把握と指示が出来ていなかった。全体的に声量が足りないように感じた。機材運搬などはキャプテンがやる必要はないのでは？
- ・ キャプテンが資器材運搬する必要はないと感じた。
- ・ いい意味で現場の状況は現場メンバーに任せていたので、キャプテン自身は詳細を把握していなかった。
- ・ 全体的に騒がしい。全員が主張しすぎていて、キャプテン(リーダー)の指示が消えてしまっている。消防と”連携”できていたかという点、自分達の主張が大きすぎたと思う。
- ・ 海水浴場の継続的な監視ができていなかった。(適切な人員配置?)
- ・ ハサミを落としていた(拾わせていない)AEDが必要と判断できるまで持っていかなかった(疑わしい場合は持っていかなければ)
- ・ 綿製のマスク(水中は不適切では?)。継続的な監視体制ができていない。傷病者記録票を本部で記載していたが、現場から情報が共有されていない。
- ・ 継続監視できなければ、ビーチクローズも選択肢として持つべき。ムダなシーバーのやり取りを減らせるといい。(必ず出る回答などは聞く必要はないのでは?)
- ・ ビーチの監視に戻るよう指示していたが、現場の対応に追われ、指示通り動いていない状況があった。
- ・ 着用済みのマスクが放置されている。
- ・ シーバーで現場に呼びかけても応答がないことが数回あった(シーバーの連絡を徹底させるか、別の方法で現場の状況を把握する必要がある。どこにどれ位の人数を。現場の統括を離れて、遊泳者を引き上げに行ったなら、やりきるべきであった。
- ・ 監視長は現場に出る可能性があるならば、それに応じた感染対策が必要。
- ・ 継続監視できていないタイミングがある。
- ・ チューブ人数分なし。現場にチューブ1本。監視長が友達とやり取り…。圧迫に入るのが遅い。監視長現場で何もやらない時間あり。本部のメンバーの人とはやり取り無し。耳元での拡声器はよろしくないのでは(友達に対して)。圧迫の継続なし。バックボード。搬送中チューブ引きずる…。救急車1台でいいのか。エボシの方にもきちんと話を聞いて、病院案内するなり救急隊に見せるべき。
- ・ 長笛なったのに本部気づかず…。長笛の時点で救急要請必要なのでは…。救急要請遅いと思う。AEDをなぜ一緒に持っていかなかったのか。現場と監視長でシーバーつながらず…。監視長、本部内で起きている傷病者に全く感心無し。
- ・ 監視長からのシーバーが現場に届かない場面あり。長笛なった時点で、救急隊要請すべき。本部の傷病者に対して特に何も声掛けなし(指示もなし)。想定終了まで処置しているが、その後どうするか指示なし。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

- ・ 本部署内、クラゲ海水で洗い流してしまう…。本部署内の傷病者に対して、次にどうすべきかを教えていた！
- ・ 本部署内の傷病者に対して、処置した後の指示がなし。常に事故発生中の現場とシーバー飛ばしあっていた。
- ・ イモビライザー落ちたが誰も気づかず。海水かけてしまった。現場とのやり取り少ない。監視長が何をしているのかがわからない。
- ・ 監視長から現場のやり取りが何度も途切れてしまう。クラゲ対応の人、シミュレーション中に、次どうすべきか言うべき。事故現場に意識取られ、本部署内の傷病者の把握ができていない。遊泳者に本部署内から拡声器で声掛け意味ある？
- ・ クラゲ対応のライフガードが処置しながら遊泳者を見るというが、何かあったとき対応できるのか。現場監視長含め5人。監視長、外国人の対応で全体把握できるのか。→その際一切本部署内でのやり取り無し。遊泳者が今溺れたら誰が行くのか。そもそも溺れたことに気づくのか。
- ・ 1人ずっとディスプレイしている。本部署内ライフセーバー無しになる時間あり。救急要請中、監視長現場近くいるが、何が起きているかは把握できてない。監視長、近くにいるが、シーバー使わず、声では指示。その後、継続監視や観衆対応と指示系統がバラバラになりかねない。
- ・ 観衆の対応。ディスプレイの上からすべらない手袋付けていた。点数は高いが、ライフガードとしての対応なのかは不明。継続監視の部分は本部署からFA対応の方が見ていたが、何かあった際は誰が行くのか。
- ・ CPRをもう少し早く始められるように訓練すべきかと思います。
- ・ 指揮項目を満たすために現場へ監視長は赴くべきかと思います。
- ・ もう少しチーム間の連携が取れれば良いと思います。
- ・ パトロール服を脱ぐことで対策をこうじるとするならば、ズボンを変えるべきだと思われます。
- ・ 救急隊の誘導が全くできていなかった。現場からの報告もないし、聞くこともなかった。2次災害を含め、監視の継続が不十分だった。溺水者のドラッグの際に腕が首に入っていた。本部署をほったらかしにして現場に付きっきりになっていた。観戦対策が1名を除きほぼ不十分であった。
- ・ 通常時もラテックスや防護着の着用をしているか疑問(審査用では?)監視長というよりも連絡係となっており、士気を感じなかった。指示待ちの現場も困るが、全く指示のない監視長ならいらない。
- ・ 遊泳者を上げる理由があるのか?→監視を置くべき。救護はほぼ無感心。傷病者を発見しても、本部署に来るまで対応しなくても良いと指示。→すぐに行かせるべき。
- ・ クラゲの温めはバケツに腕を入れる形の方がベターだった。
- ・ 第一がマスクをわざわざ外してレスキューに!女性ライフセーバーがピアスをして活動していた。本部署に人員が余っていた!
- ・ 声が小さい!現場の情報を求めている。ハンドマイクを持っていたが、有効に使われていなかった遊泳者にのみ使用。
- ・ スタート段階からラテックスとゴーグルを2名がつけていたのはどうなのか?本部署を空けて現場に張り付いていた(後半)。情報を全体で共有できておらず、監視長もあやふや。
- ・ ライフセーバーが担いでの搬送は、せつかくボードに乗せていたのに。この判断は?→危ない!!
- ・ CPRの際、ボードの上だと傷病者が滑る。
- ・ 海況のチェックなし(器材チェック優先)監視長自ら溺水現場に。処置中の海辺や監査体制無し。エボシの処置1人専任、監査長は把握していたか。
- ・ 監視長、非常に落ち着いて本部署にどっしり。CPR状況把握の問いに反応なし~そのままにしてしまった。「誰か応答できるか」→具体的LS名とか(後半は名前呼び反応有)
- ・ 溺水1stへの長指示なし。沖合のスイマー安全移送。本部署(長)との連絡・記録なし。
- ・ クラゲはFA任せで長把握する様子なし。声掛けなし→FAから報告し把握済。
- ・ スイマー、監視長が気づいたがスルー(手が足りてなかった)
- ・ CPR現場と本部署(長)の情報共有(要救)にやや時間手間とり。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 救急への「目的」伝達にちょっととまどい。沖スイマーのケアができれば完璧。 ・ グローブの装着(指示)。救急隊への申し送りを長がダブルチェックできたら尚良。 ・ 沖合スイマーケアできれば完璧。 ・ イモライザーを投げ捨てて、砂がついてしまった。使用する可能性を踏まえるべき。浜上げ一度叫んだのみで、確認していない。クラゲ対応全く状況把握できていない。 ・ 傷病者記録票記入するも、渡せていない。→現場にあるべき？ ・ 泳者の継続監視をするといっているけど、離れる場面はあったので、監視員メンバーをもっと活用して良いと思う。 ・ 人が少ない中なので誘導に行くなら、ギャラリーを活用してよいのでは？→ライフセーバーを向かわせると言ったが行かせていない。監視体制が泳者を誰も見ていない状況に気づいて対応してほしい。 ・ 消防通報のメンバーは現場に向かわせればいいのでは？せっかくお願いしているので。傷病者記録票も渡せていない。傷病者にとらわれて、全体に抜けが少しあった。 ・ ずっと単調なので、もっと現場の士気を挙げられるよう、コミュニケーションがとれればより良くなる？ ・ 監視員メンバーだが、いす等周囲を触った手(手袋)で、傷病者に渡すマスクをベタベタ触ってしまっていた。できれば詰所を離れず全体把握に徹し、搬送が始まる頃には次の展開を想定し、行動できると良い。 ・ 傷病者を坂に寝かせて滑り落ちてしまっていた。
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">監視員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 観衆の対応に遠慮していた。勢いに負けていた。監視員間の共有が少し足りていない様子があった。公的救助との申し送りが少し遅れ気味だった。 ・ 想定をよく理解して対応されていて、行動・対応がスムーズだった。他の事例でも柔軟に対応できるよう引き続きの訓練を行っていただきたい。 ・ 1人で対応、人手不足だった。(海難救助)連携不足。観衆対応に人手を要し、救助対応が不足していた。 ・ 海難救助時に砂浜まで引き上げるのに時間がかかった。(フォロー不足)救護者と情報収集との人的バランスが崩れていた。声はよく出ていたが、パニックのような感じに見えた。 ・ 傷病者記入表を活用しましょう。情報共有をしっかりとしましょう。 ・ 流木近くで処置していたので、あそこまで上げてきたら、テント内で処置しても良かったと思います。 ・ 出発後 AED 取り残していた。 ・ 雨天時に資器材を外に並べるのはリスクがあると思います。特に AED 入りバッグ含む、電子機材の扱いを再考しましょう。 ・ 頭部保持の位置→頭部側に来ないで正中位に戻してしまっていた。AED 開始の早さ。クラゲの対応良→テントから外れていたのも、雨がずっと当たってしまっていた。AED 貼るスピードが遅かった。 ・ クラゲ、すぐにお湯をしない。ピンセットも。感染防止を優先しすぎている。遅いため、アナフィラキシーになってしまう。固定した後、胸骨圧迫をする人が、傷病者をまたいで移動していた。 ・ 円を描く工夫。1stの人の観衆対応。LSがバイスタンダーを確保するのが遅かった。1stのピックアップが少しもたついてしまった。 ・ CPRの現場の声が交り合って、情報が良く聞き取れない。AEDを貼るときの確認不足。人によって観衆に対する伝えている内容が違っていたので協力者が困っていた。聴取の人が、誰に何を聞いていいかわからず、時間を無駄にってしまった。 ・ シーバーワークを活用し、重溺に人をもっと早くさくべきだと思います。AED や意識確認、CPR 開始などもう少し早く行うべき。 ・ 観衆への対応に役割を与えればもう少し楽に対応できたと思います。溺者へのアプローチを遠いテントまで運んだのが疑問点でした。 ・ 溺者へのアプローチ、ドラッグが比較的雑でした。BB に乗せてからまた消防の BB に乗せ換え

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

るのは2度手間ではないかと思う。

- ・ 救急隊の到着後、現場に4人いたが、バックボード、CPRに1人、他は関係者を確保できず、情報がなかったため、申し送りが十分にできなかった。ライフセーバーの手が空いているように見えたが、その間に観衆の対応等できていたのではないか。
- ・ サンオイルですべるため、傷病者の搬送が難しい。
- ・ 監視長が前で指示を出していたが、各ライフセーバーは指示を待っているわけでもなかったのので、監視長は本部に待機していても良かったのではないか。監視の継続という点ではやや不安がのこる。
- ・ 口鼻をタオルで押さえられていない。関係者見つからず。A車へ搬送時監視長の指示なし。感染対策ユニフォーム・マスク・ティッシュのみ
- ・ 監視員間の声掛け少ない。胸骨圧迫を打つ姿勢が正面ではなく、ななめを向いていた。
- ・ 資器材が砂の上。観衆対応を気にし過ぎており、情報収集遅い。本部に3人はもったいない。ムダなシーバーのやり取りが多い。
- ・ 雨なのに防水シートテント前。エボシ対応遅い。ドラッグ持ち方が雑であった。
- ・ 第一発見者から情報聞けてない。そもそも全力でやっているとは思わない。リーダーが居るか聞かれていたが、いない。
- ・ 第一発見者を取り逃した。ネックレスつけっぱなしでAED。観衆の対応で怒ってしまっている部分。
- ・ ボードを置く位置。時系列が取れていない。
- ・ 傷病者の対応がクラゲ、重溺共に雑。
- ・ 友人の確認が消防隊到着後で遅い。ブルーシートの使い方に工夫必要。
- ・ AED使用中にブルーシートの屋根をすべし。ブルーシートがマスクの役割していない。
- ・ 第一発見者からの情報収集と救急隊への伝達できていない。
- ・ AED使用時に雨の配慮がなかった。
- ・ 対応中のP無し→遅アナウンス。対応の遅。
- ・ 対応中のPが本部にいる？
- ・ 多重事故を防止するため、泳者を上げた。泳者への対応を評価する！その間全体パトロール無。応急処置のアシストをすべし。
- ・ シートは良いが、日陰を作って欲しい。観衆対応に2人は多い？
- ・ レスキューのアシストが遅い。
- ・ パトロールが出ていない→遅(本部に集中?)ストレッチャーの位置が遠い?対応中のDは不在!パトロールもせず、本部にLSが集中しすぎ!途中からPが出たが遅。しかもなぜ本部前(泳者にアプローチ?)落とし物も拾わない。
- ・ 遊泳者にマイクでアピールするものの中途半端。
- ・ タオルは日陰を。監視長が本部を離れる。浜パトロール不在。原則的に監視長が本部を離れることはない。
- ・ 外部との緊急連絡手段のある本部は原則的に空けない。無線があるのに、監視長が本部を離れる。ストレッチャーを使わない。泳者へのアプローチあったが遅い。
- ・ 溺者を本部まで移動は無理がある?本部に集中し、浜の安全が無。
- ・ 聴取の紙もたせてない。バックボードが傾いていた。
- ・ バックボードをしたらどうか。観衆対応一人で一人対応は効率が悪いと思う。
- ・ 水平にしなればバックボード敷いている意味がなくなってしまう。F対応で胸骨圧迫がおそろかになっている。
- ・ もっと溺者に人数かけた方がいいと思う。
- ・ すぐに胸骨圧迫を開始した方がいいと思う。吐物介助した方がいいと思う。
- ・ 関係者を早く見つけた方がいい。AEDを貼った方がいいと思う。
- ・ フェイスガードのみでは自分たちの感染予防ができてないと思う。
- ・ 傾斜を考えてログロールを行った方がいいと思う。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

- ・ 溺者発見後、FA 以外全員現場に行ってしまう海を見る人がいなかった。
- ・ クラゲの対応海水で流す必要はないです。お湯をかけるより、バケツ等に貯めて患部ごと浸けるべき。FA 対応時、傷病者と付き添いにマスクを着けてもらいましょう。
- ・ FA 対応焦っているように見えた。傷病者もつられるので落ち着きましょう！まずは触手を取って、お湯が正しい。お湯に水を混ぜていたが、熱湯でない限り混ぜる必要ない。
- ・ すぐにお湯につけましょう。袋にお湯を入れて対応するより、直に浸けた方がいいのでは？すぐにぬるくなるので、バケツに入れて患部をつけましょう。
- ・ 色んなものが地面に落ちていました…。焦らず丁寧にいった方が結局スムーズにできることの方が多いです。
- ・ ドラッグで首を絞めている。バックボードに乗せてから全員傷病者から目を離している。浜に上げた後に胸骨圧迫までの時間が長い。チューブが浜に上げるときから最後の搬送まで引きずっていた。
- ・ ドラッグ時協力してもらい足を持ってもらう。関係者を近づけてしまっている。また感染防止させていないのに傷病者に触らせてしまっている。AED が来ていない。(覚知から約 5 分後に AED 到着)
- ・ 現場の人数が足りず CPR までできていない。一人で溺者に対応する時間が長かった。監視長は現場に行き、直接指揮をとると、その場で救急要請することも考えた方がいい。嘔吐などあっても周りに知らせられなかった。
- ・ 現場の指揮を直接行える人がいればさらに良かったと思う。
- ・ 吐物を除去した手で手袋を変えず色々なところを触ってしまっている。関係者以外の人に搬送を任せるのは危険がある。
- ・ 海の中での感染対策が何もなかった。バックボードをはずしてしまったことで搬送のための手順が増えた。AED のパットの位置が悪い。
- ・ シュノーケルとネックレスがずっとつけてある。
- ・ 毛布を下に入れてあるのでなるべく水をふき取り、体温を下げないようにしてあげる。
- ・ タオルを溺者の顔に置くのはどうなのか。搬送方法は不安定で、傷病者に変化があっても対応が遅れる可能性がある。
- ・ ビーチガイドでケガ人、即応が遅い！ビニールシートの効果は何であったのか！（一般客と傷病者の隔離??）
- ・ 毛布を溺者にして、砂をつけたままでストレッチャーに乗せる。
- ・ 声のトーンを落として溺者や関係者に対して興奮させない配慮を→静かにゆっくり指示と制御をすること。
- ・ 溺者の関係者に対して日本語の単語をわかりやすくシンプルに伝えること。感染防止の用具準備はできているが、カッパの着用に手間取っている。普段から脱着練習をすること。
- ・ 「友人の方いますか」と 3~4 回大きな声にも反応しなかったらどう対応するのか、事前に考えておく。
- ・ 観衆なのか関係者なのか判別・対応の仕方が違うのでは。
- ・ 2パーソンキャリアも良いが、ストレッチャーを利用して運搬することを普段から慣れておく必要がある。ポルトガル語、ベトナム語の外国人との対応を普段から考えておく必要がある。
- ・ 溺者発見から確保まで迅速にできていなかった。状況に応じた資器材を使い分けられてなかった。
- ・ CPR 時の要救助者の姿勢が良くなかった。観衆対応に追われ処置ができてなかった。
- ・ 救急搬送を迅速にと判断したが、ボードがあるならば徒手搬送を避けた方が良い(傷病者への負担、感染防止)
- ・ バックボードに寝かせる位置下すぎ。寝かせてから CPR まで等間が長い、(感染防止具のつける時間)。監視手薄(CPR 中)。ヘッドギア付けっぱなし。ゴーグルとるタイミング遅い。顔だけ横に向けて異物除去。
- ・ ドラッグしている→バックボード上に寝かせすぎ？毛布で十分？いろんな人が密→感染の恐れ。

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

<p>友人放置→情報 0.英語に戸惑い→対応あらい。外国の方を使ってより効率よくした方がよい。ガウンはよい。ただ二人とも着替え終わるまで放置はよくない。</p> <ul style="list-style-type: none">・ ボードでクローズに声掛け。重溺二人アクセス。一人ガウン着てバックボード。ゴーグル取ってない×。濡れたままパッド貼る×→はずしてふく。パッド貼る位置×。関係者を何故一度離れさせたか？密×。CPR 押す位置斜め。一人 CPR で異物除去、寝かせたまま。バックボード上に寝かせられていない。外国人対応できないなら無視すべき。下手に対応して時間がかかっている。本部で書いた傷病者記録票渡せてない。・ 外国人対応グダグダ。円の中に三人入っている、密→途中から出す。監視主導。→そのために1人 CPR に。バックル止め時間かかっている。・ バックボードの置き方(バックル外に出す。斜めに置かない)。バイスタンダー利用してキャリア。バックボード置く位置上すぎ。逆流対応してない。・ first 本部でサージカルとしてレスキュー(プールの人がよい?)寝かせる位置下すぎ→バックボードから下ろす。知人無視→情報なくなった→途中で戻ってきても無視。密すぎ。誰がリーダーか統率とれてない。AED 本体置きっぱなしでキャリア。・ first、サージカルでない。意識見るとき、ゴーグルつけっぱなし。斜めでバックボード置いているのでずり落ちる。まっすぐ押せていない。友人放置→情報逃す。AED パッド外している(途中)AED の置く位置遠い。全体的に密。・ AED 準備後手。斜めに寝かせて斜めに押している。外人対応が力づく(少し)。ガウンがあってもいい。バックバルブマスク胃膨満の恐れは？外国人を上手く利用できてもよい？・ 三密になっている。話す努力。CPR 胸骨圧迫真上から押せていない。直接指で校内洗浄している×。唯一担いでキャリア(4 パーソン)・ 本部まで連れていき CPR。英語対応→身振りで OK。携帯をとっている途中で対応。パッドの位置もう少し横。・ 基本的なドラッグができていない。PPE 装着にもたつき、CPR 開始がかなり遅れた。胸骨圧迫のテンポが遅い。・ 重溺対応に対してサポートが来ず、ドラッグができていなかった。溺者の口元にタオルなどを置いていない。・ 搬送後、バイタル確認。CPR 開始が遅かった。周囲への対応に追われて CPR を始められていない。情報収集ほぼできていない。・ AED 貼る人の手が濡れていたのも、パッドが途中ではがれた。・ バックボードから頭がはみ出して乗せていた。救急隊が中断するまで、リーダーが情報収集できていない。リスクを確認せずに吹込みしていた。・ バイタルチェックしてない。AED パッドの貼る位置が間違っていた。・ 救急隊到着までに装着できず。誰が現場リーダーか不明慮だった。・ PPE 装着が不十分。ディスプレイせずに口内清浄。救急隊を無視して独自の方法を貫いていた(現場離脱時)。救急隊到着後は指示を仰ぐ方がよいと感じる。・ アイガードの装着をした方がよい。・ CPR マウスシールドでの CPR は×。マスクに付け替えすべき。クラゲ刺傷→アナフィラキシー様症状の観察実施した方がよい。・ クラゲでガウンいらない。クラゲ傷病者に手袋はいらない。クラゲアナフィラキシー観察が不十分。CPR を1人で行う場面多い。CPR3人中2人がアイガードなし。・ CPR はマウスシールドでは×。マスクに付け替え。クラゲ傷病者のマスク装着遅い。救護対応全体が雑。CPAの空気に飲まれている。・ ポケットマスクでの人工呼吸。やるならマスクホールドは別の人(2人法)クラゲアナフィラキシー観察説明なし。・ 全体的なLSの人数配分(優先順位)が悪かった→CPRに人が少ない。・ マウスシールドはマスクに付け替えるべき。BVM 使用時に1人法はよくない。やるなら2人法で実施する。
--

第5回JLAシミュレーション審査会 検討推奨事項

令和3年3月31日

- ・ CPRドラッグ開始～胸骨圧迫開始まで2分30秒かかっていた。傷病者にマスクなしで胸骨圧迫していた。
- ・ 感染対策が足りていない。ゴーグル、防護服等がなかった(時間もかかっている)。吐物処理も遅かった。
- ・ クラゲの傷病者をライフガードは素通りした。海で泳いでいる人に人を割く必要があるか疑問に感じた。
- ・ 救急呼ぶまで時間がかかった。フェイスシールドも良いが、自分の身はあまり守れないと思う。
- ・ 吐物ガーゼ使わず。救急隊到着後、すぐに申し送りができていなかった。
- ・ 正しい関係者確保を行えていなかった。観衆対応に人を割くことができていなかった。現場対応を最後ライフガード2人のみで人数が足りていなかった。
- ・ 関係者を一人で行動させてしまった。
- ・ 傷病者対応は良いが、ヤジ対応できず。AED貼るのが救急隊到着後だった。
- ・ シーバーを使わない(監視長が現場まで来て対応)。ディスプレイせず(感染対策マスク・サンングラスのみ)。
- ・ 立場がはっきりしているが、言葉遣いが気になった。
- ・ 全員が現場に出ており、浜全体を俯瞰的に見る人がいない。シーバーをほとんど使わない。本部←→現場の様子がわからないため単独行動。
- ・ 砂浜が斜めになっており、垂直に圧迫ができていない。観衆への目隠しが優先になってしまっている。
- ・ 救急隊の荷物を運べず早期出発できなかった。継続監視がスムーズに移れていなかった。監視長→現場へのシーバー、頻繁、長い。現場→本部シーバー早口・言葉足らずで分かりにくい。
- ・ バックボードへの乗せ方。救急隊が到着してから引継ぎができる人がいない。
- ・ 「関係者」という呼称。外国人の手をつかんで処置の現場から話していたことで落ち着いて処置できていた。しかし、そこにひとり人員が割かれ、人命救助優先にはできていない。
- ・ 防護服の着方誤り。AEDの粘着部分を砂につける。本部→現場への一方的なシーバー「〇〇取れますかどうぞ」「とれますどうぞ」の一往復を省略するチームは多いが、伝達のための重要なステップではないか？資器材をそのままにして全員現場から離れる。
- ・ 状態がわかる前にバックボード等資器材を持っていく。バックボードを使わない搬送→適切な階段の昇降方法は？担架への下ろし方は？
- ・ 傾斜強く出入り口から遠い本部前に傷病者を持ってくること→救急隊発着にタイムロス。毛布の上にバックボードを置く意味は？本部前が非常事態になることにより、継続監視できない。

